

2024特別講義

「ビジネスとICT(情報通信技術)」



主催：情報工学部 知能情報工学科

後援：校友会、経友会、知湊会(旧経工会)

目次

【敬称略】

1. はじめに	芝正孝		2
2. 2024年度講演スケジュール			3
3. 第1回 「世界の製造業で求められる多様な自動化のDX」	遠藤綾介		5
4. 第2回 「デジタルシフト・ベンチャー・イノベーション最前線」	江幡哲也		10
5. 第3回 「提供価値を起点としたビジネスモデルの創造」	網谷憲晴		14
6. 第4回 「ブランドリコマースを支えるバリューチェーンシステム」	張本貴雄		19
7. 第5回 「個の時代に必要な人的ネットワークを育む コミュニティビルディングとその考え方」	津田賀央		24
8. 第6回 「ビジネスを動かすITの設計」	劉功義		29
9. 「都市大のICTを考える」(まとめ授業におけるグループワーク)			34
10. 全体を通しての感想			37
11. 「本特別講義の終了に当たって」	芝正孝		40
付1. 講演者の詳細プロフィール			41
付2. 講演者の方々を囲んで			48
付3. アーカイブ			52

1. はじめに

「人生100年時代」が叫ばれています。また、AIなどの発展・普及により「2045年にはシンギュラリティ(技術的特異点)が到来する」とも言われています。直近では、Chat GPTなどの生成AIが大きな話題となっています。

この過去に誰も経験したことのない時代の真っ只中で学んでいる学生の皆さんにとって、「これからの未来」をしっかりとイメージし、「そのために何をしていくか？」を考えることは非常に大切です。

本特別講義のシリーズは、今、各界で活躍していらっしゃる東京都市大学出身の方々から直接お話を伺うことにより、「これから活躍していくための貴重な気づき」を与えられればと、講師の方々のご理解・ご協力の下で開講してきました。

その中で、2024年度は、「ビジネスにICT(情報通信技術)がどのように役立てられているか？」について講演していただきました。



芝 正孝

情報工学部

知能情報工学科

特任教授 博士(工学)

2. 2024年度講演スケジュール

【注】所属・役職は講演当時のものです。

日程		内容	講演者(敬称略)	所属
☆	9/24	ガイダンス（履修学生のみ）	芝 正孝	東京都市大学 知能情報工学科 教授
1回	10/8	世界の製造業で求められる多様な自動化のDX	遠藤 綾介 (2001環境情報)	(株)牧野フライス製作所 営業本部営業企画部ゼネラルマネージャ
2回	10/22	デジタルシフト・ベンチャー・イノベーション最前線	江幡 哲也 (1987電気)	(株)オールアバウト 代表取締役社長 兼 グループCEO
3回	11/12	提供価値を起点としたビジネスモデルの創造	網谷 憲晴 (1992経営工学)	(株)日立製作所 執行役常務 ビルシステムビジネスユニットCEO
4回	11/26	ブランドリコマースを支えるバリューチェーンシステム	張本 貴雄 (2007環境情報)	Free Standard(株) 代表取締役社長
5回	12/10	個の時代に必要な人的ネットワークを育むコミュニティビルディングとその考え方	津田 賀央 (2001環境情報)	Route design(同) 代表社員
6回	12/24	ビジネスを動かすITの設計	劉 功義 (2006経工・修士)	キンドリルジャパン(同) プリンシパルアーキテクト
☆	1/7	まとめ（履修学生のみ）	芝 正孝	東京都市大学 知能情報工学科 教授

講演概要

【注】所属・役職は講演当時のものです。



3. 第1回（2024/10/8）

「世界の製造業で求められる多様な自動化のDX」

【講演者】

遠藤綾介氏

（2001環境情報）

（株）牧野フライス製作所
営業本部営業企画部
ゼネラルマネージャ



3-1 遠藤綾介氏の講演要旨



【講演者】
遠藤綾介氏
(2001環境情報)
(株)牧野フライス製作所
営業本部営業企画部
ゼネラルマネージャ

1. 製造業における工作機械
 - ・自動車や携帯電話など、あらゆる工業製品の部品加工の役割を担う工作機械は、その生産性が製品品質やコストに大きく影響する。
2. 現在の製造業の課題
 - ・製造業人口・熟練者の減少、市場の急変や、環境などのSDGsなどに対応するため、工作機械にも進化が求められている。
3. 自動化/人との協働
 - ・工具棚・ワーク棚の連結、量産加工システム、部品パレット搬送システムなど、自動化による効率化を進めている。
 - ・障害を回避する協働仕様による「協働ロボット」を導入することで、分けや安全柵がなくても、人と一緒に多くの作業ができるようになる。
4. デジタイゼーション
 - ・働き方改革法案による生産性の低下や、人財不足を解決するため、機械稼働時間(Machine Time)÷作業時間(Man Time)=MM比の最大化や、作業者が複数機械を管理できる自動化を推進している。
 - ・全ての自動化は困難なため、オペレータ・管理者を主体とするデジタル化に注力している。
 - 生産スケジュールの可視化と事前予測(プロアクティブ・スケジューリング)により事前準備化が可能になる。
 - 工作機械の状態モニタリングにより、予防保全や計画保全を通して生産への影響を最小限にできる。

3-2 グループワーク成果物 「製造業と工作機械の未来予測」

課題2-1	チーム名	チームメンバ名(リーダーは赤字、オブザーバは青字)
	24	

- ・ スマート工場の推進
 - ・ 海外の工場とリンクする
 - ・ 仮想空間でシミュして無駄ない生産
- ・ 人材育成・技術継承
 - ・ 感覚ではなく、定量化して技術を残す
 - ・ ただの技術者ではなく協働できる技術者になる社内教育
 - ・ ナレッジマネジメントの構築(マニュアル/教育)
- ・ 大企業とベンチャー企業の協力
 - ・ ベンチャー企業のアイデア力と大企業の資本をマッチング
- ・ SDGs
 - ・ 高く売れない金属くずの活用(金属イオンを使った洗剤を町工場が作ったニュースを聞いたことがある。本業とは関係ないビジネスでも)
 - ・ 安い労働力をこき使わない(優良企業アピール)
 - ・ 環境に配慮(省エネ・無駄なく)

課題2-1	チーム名	チームメンバ名(リーダーは赤字、オブザーバは青字)
	37	

実現したら面白いと思う技術：あらゆる製品の異常探知を、高精度かつ自動で行う技術

製造業の現状

簡単な異常検知は機械が自動で行うことができる一方、複雑な構造を持つ製品に対する異常検知では、目視検査員が重要な役割を果たしている。



※インターネットから引用

技術が実現したら

目視検査員の役割を機械が完全に担うことで、コスト面と精度面で大きなメリットが得られる。また、ヒューマンエラーの抑制にも役立つ。

技術が実現するためには

画像認識技術の自動化を実現するためにはハードウェアとソフトウェアの両方の発展に加え、データおよびシステムのセキュリティ強化が不可欠である。

3-3 遠藤氏の講演を聞いての意見・感想(1)

私は知能情報工学科に所属しているので、普段、工作機械などの機械系やハード系に関わる機会が少ないが、機械を用いて何かを生産する生産ラインに、現在学んでいるソフトウェア系の知識、スキルを活かせると感じた。

牧野フライス製作所では、顧客からヒアリングをして、必要な量やスピードに合った製品を提供したり、自社に工場を作り自らの自動化を実践することで、顧客と同じ状況に身を置いたりして、顧客を理解しようとする姿勢を大事にし、様々な課題を解決していることがわかりました。

「脱属人化」の概念が印象に残りました。熟練者が減少していく中で、技術や知識を個人に依存せず、いかにシステム化して次世代へ継承するかが今後の製造業の持続可能性に直結します。一方で、協働ロボットと人間の協働作業における安全性と生産性のバランスをどのように最適化していくのか知りたくなりました。

ソフトウェアで機械を管理できるようになったことで普段の作業が効率的に進められるのは大きなメリットだが、何らかの問題が発生してネットワークが使えなくなった時に作業が止まってしまうことがデメリットとなる。作業計画のコピーを印刷しておいたり、複数のアプリケーションに保存したり、バックアップをとっておいて何かあっても対応できるようにするのも大事であろう。

本講義のスライドの画像からは製造業に対して抱かれるイメージである「油まみれになる」といったことは連想されず、むしろスタイリッシュで圧迫感を与えないデザインの印象を受けた。近未来を感じさせる機械類は一定のニーズがあり好印象を与えられると感じた

DX や機械のIoT 化が進むことによって生産効率は上がる一方で、セキュリティリスクも高まる。そのため、安全面での対策も併せて進める必要があるだろう。

3-4 遠藤氏の講演を聞いての意見・感想(2)

製造業の人口が減少し、熟練者も減少していることを初めて知りました。デジタル化や自動化と聞くと、効率が良くなり、少ない人数で仕事が進められるというイメージがありましたが、すべての工程を機械だけで行うことはできません。また、デジタル化や自動化が進むほど、デジタル技術に強い人材が必要になることも考えられます。どのようにして製造業にデジタル技術が活用されているかを知り、大変勉強になりました。

私は、CMA-ES(連続最適化手法)を用いた性能予測の研究に取り組んでいるため、講演で触れられた「性能予測」が実際の工場現場でどのように応用されているのか、特に興味をもち、性能予測を行う際にどのようなパラメータを重要視すべきかを考えながら聞いていました。そして、自分の研究が現実の製造業にどのように貢献できるかを考えることで、さらなる研究意欲が湧きました。

デジタル化の例で紹介されていた「インサイト」に情報情報工学科として力になれるのではないかと考えました。なぜなら「インサイト」では過去の情報から AI を使用し分析を行い、次に生かすからです。この「インサイト」のアプローチは、工作機械だけではなく、マネジメントやスポーツでも同じことがいえると考え、今後のキャリア設計の一助になりました。

若手技術者の育成や自動化技術の導入が、高齢化による影響を軽減する上で有効です。シニア技術者を再雇用しその経験を活かしつつ、作業手順やトラブル対応のノウハウをデジタル化し、新人技術者が参照できるデータベースを構築れば、熟練者が退職した後も技術を継承できるでしょう。

製造業に対して抱いていたイメージが大きく変わった。そこで、ソフトウェアだけではなくハードウェアの仕組みについてもより知りたくなった。

4. 第2回 (2024/10/22)

「デジタルシフト・ベンチャー・イノベーション最前線」

【講演者】

江幡哲也氏

(1987電気工学)

株式会社オールアバウト
代表取締役社長兼グループCEO



4-1 江幡哲也氏の講演要旨



【講演者】
江幡哲也氏
(1987電気工学)
株式会社オールアバウト
代表取締役社長
兼
グループCEO

1. イノベーションとイノベーション人材
 - イノベーションとは、既存の枠にとらわれず、全く新しい技術や考え方を取り入れて変化を起こすことである。
 - 今、大企業でもベンチャー企業でもイノベーション人材が求められているが、“イノベーター的マインド&スキル”と“アントレプレナー的マインド&スキル”を、学生の内から意識することが重要である。
2. 私たちを取り巻く社会・経済環境
 - 超少子高齢化により社会・経済環境が大きく変化してきている。
 - あらゆる産業や生活がデジタルベースでイノベーションされている中で、中国、インド、あるいはシリコンバレーに比べて、日本は圧倒的に負けている。
3. AIに対して
 - 指数関数的にAIの進化スピードが上がっている。アルゴリズムでの参入は難しいが、日本はデータ・センサー等デバイスに商機がある。
 - 社会実装、倫理的観点、そして大量の電力消費等の課題がある。
4. ベンチャー・スタートアップについて
 - ベンチャー・スタートアップの4要件は、「DX・AI」「グローバル前提」「社会課題解決」「ビジネスポテンシャル」である。
 - 「誰とやるか」「強い意思があるか」が特に大切。
 - 変革期にはたくさんのチャンスがあるので、ぜひチャレンジを！

4-2 江幡氏の講義を聞いての意見・感想(1)

Airbnb やUber が日本に参入しようとした際、「その業界が不利になるから」という理由で禁止や制限をするあたりに、日本が古い考え方で遅れていると思いました。日本は文系社会であり、もう少し理系出身者やIT などの技術系専門職の人が優遇され、エンジニアなどを目指す人が増える社会になってほしいと感じました。

中国の新形態のスーパーや医療プラットフォームの事例を聞いて日本のDX出遅れ感を肌で感じた。今後IT化が進むにつれて、今度はIT企業が環境破壊の矛先になりうる。また、電力不足が原因で経済発展が遅れてしまうことも考えられる点から、IT系でもエコを考える必要性が出てくることは新たな発見だった。

イノベーション人材としての資質を日常生活でどのように鍛えるかについて考えるきっかけとなった。好奇心を持って幅広い知識を得ること、問題解決力を磨くこと、フィードバックを積極的に受け入れることが、成長の基盤になると感じた。

知能情報工学科での学びで得られた強みは、複数領域の基盤を広く浅く学んだこと、そしてただ使うだけではなく中身の理解もしていることだと考える。専門知識を活かすことでプラットフォームとなりデファクトスタンダードを取りやすい立場にいるのではなかろうか。

IT業界では指数関数的に技術が進歩するため、その時の最新の技術を用いて類似サービスを展開できる後発のほうが優位であることが驚きであった。また、生成AIの台頭により職業の序列もかわり、プログラミングのような単純なIT系の人材は不要になっていく可能性が非常に高いことを実感した。

日本での生活に不便はなく、むしろ良い国に生まれたと思っていたため、経済活動においても他国を寄せ付けないほど、圧倒していると過信していた。特に、衝撃を受けたのは、世界時価総額ランキングの戦後初期と現在を比べた時の日本企業の少なさだ。

4-3 江幡氏の講義を聞いての意見・感想(2)

安定を求めることは人間の本能であるが、現代の社会においては、ただ安定を求めているだけでは個人としての成長や新しい価値の創造が難しくなる。自分の手の届く範囲であっても、チャレンジすることの重要性を認識することが、個人の成長や新たな価値の創造につながり、結果として社会全体のイノベーションの促進にも寄与する。

無知の知という言葉もあるように自分がいかに無知であるかを自覚することも大切なのだと学ぶことができた。これからはインターネットだけでなく新聞や本などあらゆる媒体で知識を吸収し、自身の知識を日々更新していく。

技術の革新だけでなく、個人の生活やキャリアの面でも、常に自分を見つめ直し、柔軟に対応していくことが大切だ。イノベーションやアセットマネジメントといったテーマは、自分の未来に向けた準備をするために非常に有益であり、今後の人生設計にも活かしていきたい。

江幡さんの論理的で滑らかな話の進め方や、複雑な概念をわかりやすく説明する姿は、私にとって今後の発表や人前での説明におけるお手本となるものでした。今後のキャリアを考えるにあたり、江幡さんのように多くの人にわかりやすく物事を伝える力を身につけ、自分の考えを共有し、多くの人々と連携して価値を創出することを目指にしたいです。

テクノロジーの発展と倫理的価値観の両立を図りながら、社会全体の健全な進歩を実現するためには、私たち一人一人の意識改革とともに、社会システム全体での包括的な取り組みが重要となります。また、持続可能かつ倫理的な技術活用を促進し、デジタルデバйд解消や、テクノロジーへの理解などを通し、未来社会の創造に向けて進めていく必要があると感じました。

5. 第3回 (2024/11/12)

「提供価値を起点としたビジネスモデルの創造」

【講演者】

網谷憲晴氏

(1992経営工学)

株式会社 日立製作所

執行役常務

ビルシステム

ビジネスユニット CEO



5-1 網谷憲晴氏の講演要旨



【講演者】

網谷憲晴氏

(1992経営工学)

株式会社 日立製作所

執行役常務

ビルシステムビジネスユニット

CEO

1. 社会課題の変化とビジネス変革の必要性
 - ・ 人口の増大と経済の変化とエネルギーの需給が釣り合っていない。
 - ・ 課題変化と技術加速でMoving Targetの傾向が高まっている。
2. 価値を起点とした発想の重要性
 - ・ モノからコトへ消費行動も変化しているので、顧客価値を起点とした「コト中心」の新しいアプローチが必要になってきた。
 - ・ イノベーション先行のアプローチからコマースライゼーション先行のアプローチに代わり、外部技術の積極活用やリスクの分散も重要である。
 - ・ 社会と経済も変化し続けており、将来を予測することも困難であり、CAPEXからOPEX重視(オペレーション効率の向上、設備の集約やアウトソーシング、アセット保有型からサービス型)へ変化させることが大切。
 - ・ その変化に対して、データ・AIで対応する必要がある。
3. 事業革命を起こすこれからのリーダーシップとは？
 - ・ 自分なりの哲学を持ち、軸をぶらさず、執念を持ちやり遂げる。
 - ・ 情報をインテリジェンスに転換し、未来の潮流を読み解く。
 - ・ エコシステム思想で考え、コミュニケーションを高める。

5-2 グループワーク成果物 「将来の社会課題と求められる価値提供」

課題4-1	チーム名	チームメンバ名(リーダーは赤字、オブザーバは青字)
	30	
「温暖化の加速」に対して - エネルギー - 省エネ - システムの効率化 - クリーンエネルギー - CO₂減少 - 植林 - 都市部を冷却化 - 第一次産業の支援 - リアル植物人間 - 倫理的に難しそう		
都市部の自然開発 - 都市環境科学者 - 植生地理学者 - 各企業 - 自然管理 - 人員増加が望ま CO₂削減者を増やす - 協力者に対して - 特典 - 減税		

課題4-1	チーム名	チームメンバ名(リーダーは赤字、オブザーバは青字)
	23	
将来の社会課題: 人材的な課題 求められる価値提供 →若手・優秀人材の確保と成長環境の整備個人レベルの価値: 年功序列の撤廃や柔軟な評価制度の導入で、若手が意欲を持って働ける環境を整える必要がある。また、大学に関しても研究費の問題でもう大学生という早くの段階から海外に流出している現実があるため、キャリアにおける魅力的な成長機会や、ワークライフバランス、さらには生活面での充実感を提供することが重要。 社会全体への価値 →人材不足や流出が改善されると、国内の経済や技術の成長が促進され、他の社会問題(経済停滞、イノベーション不足、AIの拡大など)も解決へ向かう道筋がつく。また、日本の技術力向上が世界全体の技術革新に貢献し、グローバルな社会課題(環境問題など)の解決にもつながる。 新たな視点や技術: 年功序列や固定的な待遇制度が若手の成長意欲を阻害し、海外への流出を招いていると考える。これを解決するには、若手が成果に応じて評価される仕組みやキャリアアップの機会が増える制度が求められ、加えて、海外で経験を積んだ人材が日本で活躍しやすいような環境を整えれば、知識と技術が国内に還流し、日本の技術力が高まるのではないかと。 優秀な人材を手放さないことが大切 →海外経験者と日本企業、技術者・研究者と政府		

5-3 網谷氏の講義を聞いての意見・感想(1)

「農業が最も人間らしく働ける職場のはず」という言葉が胸に刺さった。現在の社会課題でエネルギー問題や労働力問題、インフラ整備などがよく挙げられるが、農業はどの問題にも関連がある。ドローンの制御の技術も向上しているので、航空写真や過去の収穫のデータから、「この時期のこのエリアだけ」といった農地の貸し出しができれば素敵だろう。

「物を売る時代は終わった」という言葉が最も心に残った。これからの時代は「人間中心」の価値提供が求められるという点を改めて実感し、自分が今後どのように社会に貢献し、どんな価値を創造していくかを考えながら、就職活動を進めていきたいと強く思っている。

時代に置いて行かれないことを目的とするのではなく、他の何かを得る道程と一緒に時代の変化と触れ合っていくというメンタリティが特に重要になる。

ビッグデータ化が進む中で、ITインフラの重要度は一層増しているが、それに伴い維持管理コストは人件費、消費電力といった点で増加している。高齢化、人口減少、原発への不信といった社会の問題を自分事として捉えられるようになった。

これまで私は未来を予測しながら行動する力をつけようと考えていた。しかし、本講義を通じて、常にアンテナを張り、情報を集め、社会の変化(テクノロジーの変化など)から生じるニーズの変化をいち早く捉える力を身につける方が時代に適していると感じた。

価値の創造に関して、グローバルな市場の視点と、ミクロとしての消費者・供給者各々に関わる視点という両方をつなぐ話をされていて、非常に興味深かったです。特に、“One for All, All for One”の視点を網谷氏が重要視されていることは、非常に心強かったです。

5-4 網谷氏の講義を聞いての意見・感想(2)

不確実性が増す現代において、リーダーに求められるのは、社会課題に向き合う確かな視座と、価値創造への強い意志だと感じました。網谷さんの講義は、自身のリーダーシップを見つめ直す貴重な機会になりました。

課題は「やりたくないもの」や「めんどくさいもの」として扱ってしまうことが多いが、これを成長する機会と考えることで、自然とモチベーションが上がり、最大限の力を発揮できると考えます。そのため、こう考えることによって、ただタスクをこなす時以上に力が身につくと感じました。

顧客から提示された課題に対して既存の枠組みを流用するのではなく、それを組み合わせたり他の企業と協力したりすることでより満足してもらえる解決策を提示することができる。また課題を解決した先の社会から逆算して考えるバックキャスト思考により、効果的なプランを作ることができるようになる。

私は来年部活のリーダーになる予定ですが、今まで自分の不器用さに不安を感じています。今回の講義を通じて前向きに取り組む方法を見つけました。まず、リーダーとして部員にどのような価値を提供できるかを意識し、自分なりの「価値を起点としたリーダーシップ」を実践します。また、一人で全てを抱え込まず、部員と意見を交換しながら協力して目標を達成する「協創型のリーダー」を目指します。

「価値」を中心としたビジネス変革の重要性を学ぶとともに、社会課題や技術進化がもたらす新たなビジネスチャンスを考える契機を得ることができた。エコシステム型ビジネスモデルやデータ活用の視点は、企業が競争力を維持しながら持続可能な成長を目指すうえで不可欠な要素である。これらの学びを基に、今後のビジネスのあり方や個人のキャリア形成においても、社会課題を解決する視点を忘れず、新しい価値を創造することを目指したい。

6. 第4回 (2024/11/26)

「ブランドリコマースを支えるバリューチェーンシステム」

【講演者】

張本貴雄氏

(2007環境情報)

Free Standard(株)
代表取締役社長



6-1 張本貴雄氏の講演要旨



【講演者】

張本貴雄氏

(2007環境情報)

Free Standard(株)
代表取締役社長

1. 昨今の社会背景

- 大量生産、大量消費、大量廃棄のリニア型から適量生産、適量消費、循環利用のサーキュラー型への変革が進行している。

2. 事業を創造する上で大切にしていること

- 成功のタネは顧客にあり、頭の中で考えることよりも、実際に顧客のもとへ行ってその声を聞くことが成功への近道となる。
- 時代×タイミング×熱量の3要素が重要。トレンドと目指す方向をリンクさせることが求められる。
- 事業における競合環境を分析し、レッドオーシャンの中のブルーオーシャンを見つけて、切り込んで行くことが必要とされる。

3. サーキュラーエコノミーの重要性と現状

- 需要と供給の崩壊により、世界では服の60%が廃棄されている。
- 一方、メルカリなどのリユース、Appleのリコマースなど、消費行動が変化し、2次流通市場が急成長している。
- 海外では、循環型への移行を促す法規制などが行われているが、日本はまだ。日本では1次流通と2次流通を繋げる必要性がある。

4. 事業創造のポイント

- 世の中のトレンドと自分が成し遂げたいことをリンクさせる。
- スタンスと探求心と熱量が必要。
- 常に「なぜ」を問いかけ、自分が創ったものを壊せる強さが必要。
- ヒト、モノ、カネを最大化させるためには巻き込み力が重要となる。

6-2 グループワーク成果物 「なぜタイミーは急成長を遂げられたのか？」

課題5-1	チーム名	チームメンバ名(リーダーは赤字、オブザーバは青字)
	8	

時代	タイミング	熱量
・働き方改革の推進 柔軟な働き方や副業が認められる社会の流れ ・人手不足の深刻化 特にサービス業や物流業界での即戦力需要が増加 ・テクノロジーの進化 スマートフォンの普及とアプリ文化の成熟 ・個人の価値観の変化 自由度の高い働き方を求める人々が増えた	・コロナ禍と新しい需要 短期的な働き手を求める企業と、収入源を探す個人をつなぐ絶好のタイミング ・空白市場への素早い展開 他社が進出する前に市場を開拓 ・デジタルインフラの成熟 オンラインプラットフォームが受け入れられる環境の整備。	・創業者のビジョン 即日勤務という新しい働き方への強い信念 ・ユーザーからの共感と 働き手と企業の「課題解決」期待感がサービス拡大を後押し ・サービス改良のスピード 顧客ニーズに即座に対応するリギッシュなチーム

課題5-1	チーム名	チームメンバ名(リーダーは赤字、オブザーバは青字)
	24	

なぜタイミーは急激な成長を遂げられたのか？

1. 拡大するGig Economy市場であるSpot work市場(仕事の32.6%)に日本で初参入
“Winner takes All”がplatform産業の特徴
2. 柔軟、単発、短期の労働
3. 即時のマッチング (応募後1日以内にマッチング)
4. 相互評価とペナルティ・ルールで労働者の規律を維持
5. マーケティング(2022年11月から橋本環奈氏利用のCMで登録者数大幅増)
6. 企業、労働者、タイミー、Win-Win-Win のマッチング

更なる成長に向けて: 評価システムの透明性の確保、企業側にもペナルティ導入(闇バイトの規制)、福利厚生、一定以上のスキルを持つ労働者側に求職広告提示を許可、等

少子高齢化で労働力はますます不足する中、高齢者は柔軟、単発、短期の雇用なら可能なので、今後もタイミーは成長する。

6-3 張本氏の講義を聞いての意見・感想(1)

自らの関心や目標を明確にし、それを社会的ニーズやトレンドと結びつける習慣を持つことが重要だ。また、リーダーシップを発揮して他者を巻き込みながらアイデアを具現化する経験を積んだり、デジタル技術や市場分析のスキルを磨くことは、事業創造のための具体的な武器となり得る。張本さんの講演をヒントに、顧客視点で課題を捉え、トレンドを味方につける力を身につけることで、今後のキャリア形成に繋げていきたい。

環境問題への意識がさらに高まると同時に、サーキュラーエコノミーの考え方を日常生活や将来のキャリアに取り入れたいという意欲が芽生えました。今後は、環境負荷の軽減とビジネスの成功を両立するアイデアを模索し、社会に貢献できる取り組みに挑戦していきます。

なぜを5回繰り返すという探究心は、プログラミングやシステム設計において、特定のバグやエラーが発生した際の解決策を見出したり、良いアイデアを生み出すために必要不可欠な姿勢だ。

テクノロジーの力で社会をより良い方向に変革できるのだと実感しました。私は大学での学びを単なる技術開発にとどめることなく、持続可能な社会の実現に向けた具体的なソリューションを提案し実行に移せる、すなわち私の開発によってHARD THINGS からGOOD THINGS に変えることができる人材になりたいです。

今回のグループワークでのタイミーの資料のように、グループワークで行う内容を事前に把握できていて資料もアップロードされていると、各自が準備してある状態で話し合いが始まるため、以前よりも意見が出やすくなった。

インターネットの普及により、情報の民主化が進んだことで、現在では、情報を得るための環境よりも、情報を得てからビジネスを展開するまでどれだけスピード感をもって動けるかが重要だ。したがって、私は今回の講演を通して、ビジネスをする上で行動力が重要であることを学んだ。

6-4 張本氏の講義を聞いての意見・感想(2)

印象的だったのは、張本さんが顧客の声に真摯に耳を傾け、そこから新しいビジネスモデルを構築されてきた点です。理系の学問においても、研究のための研究に陥ることなく、誰のために、何のために技術を開発するのかという視点を持ち続けることの重要性を学びました。

今までは、コスパ重視・タイパ重視と思っていましたが、今回の授業を受けたことによって、タイムパフォーマンスだけが重要ではなく、コストや利便性も考えて行動することによって、長い時間でみると最終的に一番良い方法にたどり着けるという考え方が生まれました。

顧客の声を安易に聞き入れすぎるのは危険だ。確かにサービス自体の質を上げるには顧客の声を聴くことは重要だが、顧客の要求が社会全体の利益と反する場合もある。世の中を良くしたいと考える企業であるならば、顧客の意見を単に受け入れるのではなく、自らの価値観を認めてもらうことが必要になる。

オンラインの利便性と店舗の体験価値を融合させる「ハイブリッドモデル」の導入や、顧客とブランドが一体となって新たな価値を創出する仕組みが、これからの競争力の鍵となります。私は今までアルバイト先の成長など、あまり考えて働いていませんでしたが、これを機に、自分でも何か貢献できるのではないかと考えを改めました。

「正解を探そうとするから難しい」という言葉が印象的でした。世の中には正解は存在せず、答えが用意されていない状況で、自分の頭で考え、自分の意見を持つことが重要です。将来就職した際には、業務上の課題やチームの進むべき方向について、自分で調査し、仮説を立てて意見を出すことを心がけます。また、世の中に溢れる情報をただ受け入れるのではなく、その背景や理由を探る努力を怠らないようにしたいです。

7. 第5回 (2024/12/10)

「個の時代に必要な人的ネットワークを育む コミュニティビルディングとその考え方」

【講演者】

津田賀央氏

(2001環境情報)

Route design(同)
代表社員



7-1 津田賀央氏の講演概要



【講演者】

津田賀央氏

(2001環境情報)

Route design(同)

代表社員

1. コワーキングスペース「森のオフィス」

- 都心からの移住を促進し、新たな産業や業種に従事する人を増やすため、八ヶ岳山麓の富士見町に「森のオフィス」を作った。
- コミュニティの育みの中から、大小様々なプロジェクトが生まれた。

2. コワーキングスペース「PILE」

- 人同士の関係性が希薄な都市部様々なプロジェクトが生まれることを後押しするため、様々なタイプの制作作業や創作活動にフォーカスしたコワーキングスペース「PILE」を横浜市内に開設した。

3. 地域の賑わいを創造するための要素

- ①「地域の取り組み」によって②「住民, 事業者同士の繋がり」が育まれ、それが地域住民に③「地域に対する愛着」を醸成させ、結果として「賑わいのある地域」へ発展する。

4. コミュニティ育成のための土壌作りとその意義

- コミュニティは作るのではなく、コミュニティが育つ土壌を作り、自己成長の手入れをし続けるという考え方が重要である。そこでは、
 - a. 状況の行末を見届け、良い動きを見極める観察力
 - b. 試行錯誤する行動力
 - c. カタチにする実行力
 - d. 起きた事象に対してすぐに呼応する反応力
 - e. 他者の希望を理解する共感力と利他力が必要。

7-2 グループワーク成果物 「コミュニティを育む土壌作りに必要な能力」

課題6-1

チーム名

26

チームメンバー名(リーダーは赤字、オブザーバは青字)

- ・ 共感力・傾聴マインド:人とコミュニケーションにおいて人の意見を聞けるべき
- ・ 外交的:コミュニティの活性化に焦点を当てると、助けを求められたり、おせっかい焼ける人
- ・ 自分の意見を言葉にできる人
- ・ 場を和ませられる人(コミュカ?柔軟性?):話し合いで意見が合わなかったり気まずい空気を和やかにできれば、コミュニティの居心地UP
- ・ 会話の種を作れる人:話の流れを作れる人
- ・ 人の話したこときちんと聞いて覚えていて人
- ・ リーダーシップ:チームを引っ張れる人
- ・ 行動力:口だけは△
- ・ 経験者:以前コミュニティを作ったことのある人
- ・ 情報系に精通:基本的なIT系の操作ができるべき

課題6-1

チーム名

5

チームメンバー名(リーダーは赤字、オブザーバは青字)

- ・ コミュニケーション能力
- ・ ポジティブに捉えられる力
→この二つの能力はどの場においても大事
- ・ 人の行動や言動を長期的に見てあげる
- ・ どうしてもキャパオーバーしてしまいそうな場合、タスク移譲ができること
- ・ 自分と相手の能力を比較せず、得意だと考えられる能力を伸ばす
- ・ リーダーや同僚は、周囲の人間のネガティブな行動をフォローor見逃す能力が大切
- ・ 納得してもしなくても、必ず現状や発言、意見に対して理解する能力
- ・ 自分がやられて嫌なことはしないのは、勿論
相手のことを思いやる際、相手の人間を見て何をされたら嬉しいか、しっかり常日頃から相手に関して観察すること(情報収集能力)
- ★同僚のみならず、どうしたら顧客が喜んでくれるか行動する利他力!
- ・ 入った現場に対して入りたての時は、どのような現場になっているのが現状を把握すること
- ・ 現状を把握したうえで、良いところは良いまま活かし、改善がみられるところは改善するが、お手本の例が無い場合、外部からリーダー的なポジションの人がしっかり学習してくる能力
- ・ リーダー的なヒトは、専門的な用語やスキルを使わなくても、他の人が理解できるように、伝授する能力
- ・ ★しっかり引き継ぎたい、実践してほしい内容に関しては、お手本プレイが必要!

1

7-3 津田氏の講義を聞いての意見・感想(1)

地方は慣習が強く根付いているイメージがあるのに、その中で「慣習や常識にとらわれることなく個々が望む生き方を追求する」というミッションを掲げているのが目からうろこだった。都市部でも地方でも、人と人同士を繋ぐきっかけが必要なのは変わりなく、それが創造性につながるという本質を捉えたビジネスだと感じた。

今回の講義で全く異なる境遇を生きてきた人達と新しい繋がり方でワークショップや仕事を行う事で、自分に興味が無かった分野への興味関心が湧くようになり、今まで取り組んできた活動や自分の考えにも変化が生じるのではないかと期待で胸が膨らんだ。

講演で学んだ「他者の希望を理解することの重要性」や、「衝突も成長の糧になる」という考え方が特に心に響きました。こうした考えを持つことで、より前向きに他者と関わる事ができると実感しました。

印象に残ったのは、コワーキングスペースが単なる仕事の場にとどまらず、生きがいや価値創造の場になるという点だった。「森のオフィス」では、単にお金を稼ぐことを目的とせず、個々の生きがいを見つけることができる環境が整っている。

「コミュニティは作るものではなく、育むものだ」という考え方は、私にとって非常に新鮮であった。新しいプロジェクトや事業を始める際には、無理に何かを「作り出す」のではなく、まずは人々が集まりやすい環境やつながりを作り、そこから自然に新しいアイデアや活動が生まれていくのだということが理解できた。

都会と自然、仕事と趣味といった二つの異なる要素を融合し、自らの生きがいを見つけることが、これからの社会における理想の働き方・暮らし方だと感じました。

7-4 津田氏の講義を聞いての意見・感想(2)

私は高校生時代に、同級生のアフリカ人に数学を教える役割を担った時、彼からアフリカの教育の現実について聞き、アフリカの子供たちに英語で手紙を書き、教育の需要について調査した。アフリカからは郵便で返事が来て、教育需要が高く、スマホはかなり普及していることを知り、英語でオンライン教育を提供することを考えて来た。現地を頻繁に訪れることは難しいので、津田氏のような2拠点にはならないが、「心は2拠点」という意味での、virtual2拠点を考えている。

従来は企業や行政がトップダウンで企画を打ち出し、人々がそれに従うかたちが主流だった。しかし、人口減少・産業構造の停滞が見られる現在、外部からの「誘致」だけでなく、地域内部からの「主体的な声」や「やりたいこと」が求められる。これから私は、地域をただの資源の供給元と見るのではなく、自らがその一員となり、ともに課題を解決する「当事者意識」を持ちたい。

クリエイティブな思考を育むためには、個人がただ知識を蓄えるだけでなく、異なる背景や視点を持つ他者と積極的に関わり、その意見やアイデアを取り入れることが重要であると再認識した。今後は、大学生活や社会活動の中で、意図的にこうした場やネットワークに参加し、自らが新しい価値創造に貢献できるような環境作りにも関心を払っていきたいと感じた。

「個」と「コミュニティ」という一見対立しそうな要素が、実は相互に支え合い、新しい可能性を生み出す力になるという点に気付かされました。また、デザイン思考やUX デザインという視点は、技術分野だけでなく人との関わり方や地域づくりにも活用できることを知り、非常に実践的だと感じました。

「土壌づくり」のプロセスは、コミュニティ形成だけでなく、個人や組織の成長にも応用できると感じました。

8. 第6回 (2024/12/24)

「ビジネスを動かすITの設計」

【講演者】

劉功義氏

(2006経工・修士)

キンドリルジャパン(同)
プリンシパルアーキテクト



8-1 劉功義氏の講演概要



【講演者】

劉功義氏

(2006経工・修士)

キンドリルジャパン(同)
プリンシパルアーキテクト

1. ITにおけるアーキテクチャ

- ・ アーキテクチャとは建築構造、建築様式、設計思想を意味し、「何が解決したい課題か？」を正しく把握することが重要となる。
- ・ 情報を利活用し社会の課題をどのように解決するため、姿形の見えないITは、ビジネス、アプリケーション、テクノロジー、ハードウェアの4つのアーキテクチャとして捉える。

2. システム設計の主な流れ

- ・ 「ゴールの明確化」「システム範囲設定」「概要図作成」「実現すべき機能の決定」「機能間の関係整理」「機能配置」「実現計画立案」

3. 未来を創るAIとの向き合い方

- ・ AIの技術の発展はめざましく、AIを実装した製品や生成AIの登場によって、社会を変化させるほどの影響を与えている。
- ・ 今後、プロンプトエンジニアリングが重要になり、また、AIが作り出す「幻覚」に惑わされないようにすることが大切になる。
- ・ そこでは、課題設定や解決のアプローチの考え方が基礎になる。

4. 大学、大学院で学べるもの

- ・ 学部では、最先端を知り、課題の解決方法を学べるのに対し、修士では、最先端をこじ開ける新しいイノベーションへ挑戦でき、博士ではさらに、新しい世界の確立に挑戦することができる。
- ・ 大学、大学院で得た課題解決能力はビジネスにおいても応用可能であり、武器となる。

8-2 グループワーク成果物 「未来の図書館とAI」

チーム名	チームメンバ名(リーダーは赤字、オブザーバは青字)
課題7-2	32

現在の図書館の問題点

1. 利用者のニーズに対応しきれていない
 - 書籍や資料の貸し出しに時間がかかる。
 - 希少書籍の検索や取り寄せが難しい。
 - 電子化された書籍が少なく、貸し出し中の本は借りることができない。

2. 運営コストの問題

- 人件費や施設維持費が高い。

3. 情報のデジタル化の遅れ

- 紙媒体の資料が多く、デジタル化された書籍やデータベースが不足。

AIが解決できる問題

1. 資料検索

2. 自動化された運営

- 貸し出し・返却の自動化(RFIDや顔認識技術を活用)。

3. デジタル化の促進

- 書籍や資料をAIを使ってスキャンし、全文検索可能なデジタルアーカイブを構築。

未来の図書館はどういう場所であるか

利用対象者各人のニーズを満たす、訪れたいと自然に思える場所。

チーム名	チームメンバ名(リーダーは赤字、オブザーバは青字)
課題7-2	36

1. 今の図書館の課題

- ① なんとなくで好みの本が見つからない(例: 泣ける本、楽しい気分になれる本など)
- ② 借りた本の傾向を分析できない
- ③ 本の置き場所が間違っていることがある
- ④ 行きづらい
- ⑤ 自習スペースの空き状況がわからない
- ⑥ 探してた本があるかどうかわかりづらい
- ⑦ 何冊も借りたいときに歩かないといけない

2. AIでどう解決するか

①②⑤⇒一斉管理するアプリをつくる。AI上で図書館にある本を分析し、キーワードを入れただけでおすすめの本が出てくるようにする。また、貸し借りの状況も記録することで、そのユーザーにあった本を選択できるようにする。そこに空き状況管理を追加する。

③⑥⑦⇒本にICチップなどを付け、お菓子の自動販売機のように機械が本を選んでとってくれるような倉庫を作り、機械化&デジタル化することで解消するのではないかな。

④上記を実践できれば、図書館にも行きやすくなるのではないかな。

8-3 劉氏の講義を聞いての意見・感想(1)

重要なことは、お客様が抱える表面的な課題ではなく、その背景にある「理想」を見据えたソリューションやアーキテクチャを提供することだ。社会人としては、単なる問題解決にとどまらず、お客様が目指す理想像を支える提案ができるよう意識したい。

特に印象的だったのは、システム設計における階層構造の概念である。アーキテクチャは、ビジネス層、アプリケーション層、テクノロジー層、ハードウェア層といった複数の階層から成り立っており、それぞれの階層が独立しつつも密接に関連していることが分かった。これにより、各層の専門知識を生かしながらも、全体の統一性を保つことができる。

アーキテクトの役割については、単なる技術者ではなく、課題解決のリーダーとしてチームを牽引し、全体の構造や設計思想を考える存在であると理解した。

AI の幻覚については、「どのようなAI 内のアルゴリズムで起きるのか？」に関してとても興味があり、その学習のために、時々ChatGPT に唯一解の数学問題を質問し、誤答の際には正解をプロセスつきで伝えている。自分の経験を含め、現時点ではAI に頼り切るのは危険で、欠点を理解した上で適切な利用に留めることが重要だ。

アーキテクチャという分野は一見すると非常に専門的で難しいように思えるが、それが「人々の求める価値を形にするための手段」であると講演を通じて気づいた。知能情報工学科の学生として、この「価値を形にする」という視点を持ち続け、研究を進めていきたい。

技術の活用がもたらす社会的インパクトについて深く考える機会を得ました。AI やアーキテクチャ設計の可能性を最大限に活用し、社会課題の解決に取り組むことで、より持続可能で公平な未来を築く一助になりたいと考えています。

8-4 劉氏の講義を聞いての意見・感想(2)

世界には多くの未解決課題がありますが、アーキテクチャ思考やシステム設計手法をベースに、まずは小さな改善から大きな飛躍を目指していくことが重要だと感じました。そのプロセス自体が、修士・博士での学びと同様に、価値ある新たな一步を切り開く鍵だと学ぶことができました。

企業が社会課題に取り組む姿勢について多くの示唆を得ました。キンドリルの、「教育支援や気候変動対策」、「インクルーシブ経済の実現に向けた取り組み」が具体的に示され、ICTを通じた社会的インパクトの可能性を強く感じました。特に、SDGsを支援するAI やデータ分析技術の応用など、持続可能な社会構築においてテクノロジーが果たす役割の大きさを再確認しました。

最新技術を、単に知識として習得するだけでなく、それを社会課題の解決に活用する視点と姿勢が極めて重要です。それを実現するためには、継続的な学習と実践、そして協働を通じた多角的な視点の融合が不可欠であると深く理解しました。

今回の話を聞いて、学部生では「学んだことを卒業論文に書き起こして終わってしまう」ことがわかった。私は環境社会問題の「これまでの研究技術で解けない課題の解決」に少しでも貢献したいと考えているため、修士課程を目指し、あわよくば博士課程までチャレンジしていきたい。

将来的には自分がAIを使用したコンテンツを提供する側に回りたいと考えていますが、自然言語処理や機械学習の分野については深く学んでいません。横浜キャンパスには環境学部のほかにメディア情報部の講義を受けることができるので、今の環境分野、経営分野の学びもしつつ、新たな知識を入れるため、積極的に他学部履修を活用していこうと思います。

私が最も強く感じたのは、「技術は手段であり、目的ではない」というメッセージだ。技術はあくまで社会やビジネスの課題を解決するためのものであり、その活用方法次第で人々の生活に大きな影響を与える力を持っている。

9.「都市大のICTを考える」

まとめ授業(2025/1/7実施)
におけるグループワーク成果物



9-1 グループワーク成果物 「あなたが都市大のCIOになったら？」

課題8-2

チーム名

32

チームメンバー名(リーダーは赤字)

解決案:
教科書シェアサービス

目的:教科書を購入しなくてもよくしたい
運営者:学生支援または図書館

プール方式:空間だけ提供

メリット:

- ・人同士の接触がないのでトラブルが少ない
- ・その場にある書籍のデータベースだけあれば良いので楽

デメリット:

- ・おいておく場所がない
- ・何らかの法規に触れる可能性

マッチング方式

-人のマッチング

メリット:

- ・人同士なのでトラブルの種に
- ・おいておく場所が不要

デメリット:

- ・プラットフォームの作成管理が大変
- ・貸出側の侵襲性が高い

-交換会

メリット:

- ・人の直接接触がない

デメリット:

課題8-2

チーム名

グループ2

チームメンバー名(リーダーは赤字)

東京都市大学のICT関連業務におけるCIOの役割とシステム提案

#AIを使ったチャットシステムの導入

学生が自由にAIを使えることにより、課題や調べ物をスムーズに行えるようにする

・24時間対応のFAQサポート導入

問い合わせなどの負担を軽減することができる。例えば、履修登録の制度や、ウェブクラスの登録などの簡単には理解できないようなシステムをAIを使って将来のビジョンと共にAIと一緒に考えてくれる。

・就活のサポート

就活のスケジュールや面接の練習をAIを使うことによって予想される質問を都市大のコミュニティで共有できる。

・AIを使った講義の要約サービスで講義の内容をまとめてくれる

100時間という講義の中では、集中力が持たなかったり、複雑な講義は一度では理解できなかったりする。そのため、AIが講義内容を要約することによって文書として保存でき、成績向上につながると考えられる。また、留学生にも対応できるように言語を設定できる機能を作ることで留学生もより理解することができた。

・電子図書館システム

AIを活用してレポート課題のテーマに沿った文献を学生におすすめしてくれる。

より有意義なレポート課題を作成することができる。

また、書籍のようなく機能にAIを組み込むことによってたくさんの文献を参照して様々な角度から考えることができる。

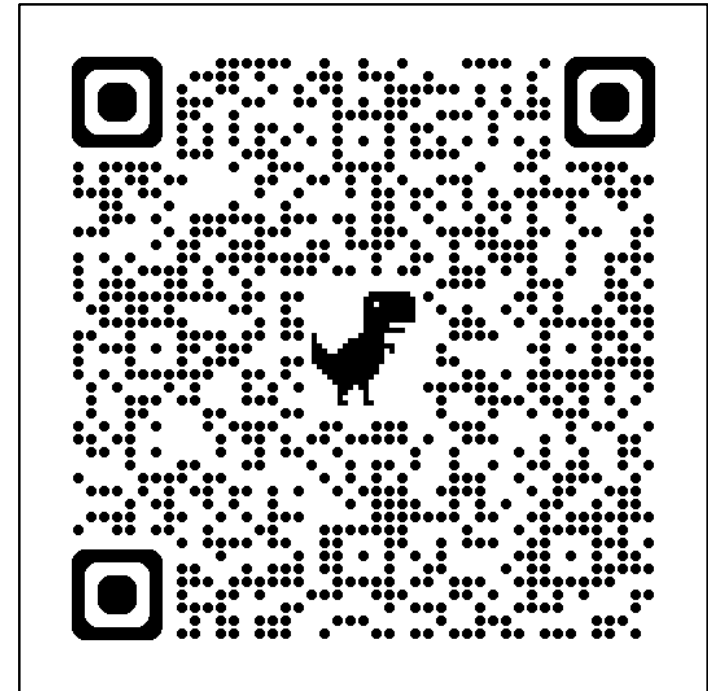
9-2 グループワーク成果物 「あなたが都市大のCIOになったら？」



東京都市大学ITに関する学生意見 2024年度特別講義「ビジネスとICT(情報通信技術)」提出課題より作成



2025.1.27
情報工学部
知能情報工学科
教授 博士(工学)
芝 正孝
mshiba@tcu.ac.jp



東京都市大学のアカウントを持っている人に限定しますが、右のQRコードから、このグループワークで集まった学生の皆さんの意見を整理したものを閲覧することができます。

10. 全体を通しての感想



10-1 特別講義全体を通しての意見・感想(1)

私の学部が環境創生学科のため、機械やITに触れることがありませんでした。知識の少ない状態でのスタートだったため、初めの内は「どう考えていけばいいのか」、「改善策はどうすべきなのか」と沢山頭を使いました。しかし、今までとは違う考え方や新しい分野に挑むことができとても自分の力になったと思います。

上のレベルのことを考えるのはとても良い勉強になるが、グループワークでの多くの方とのコミュニケーションが難しかった。

とても興味深いテーマばかりで、受講してみて良かったです。

専門知識がなくても理解ができる内容で本当に有り難かったです！ 本当に楽しかったです！ ありがとうございます！

授業開始時刻を早めると参画しやすくなります。

卒業生がグループメンバーにいらした時の素晴らしい経験(一度だけです)から、できればもっと多くの卒業生に参加頂いて、各人隔週の講義で卒業生をグループメンバーに含むことができれば、学びの幅と深さが広がるように思いました。

最初は「単位のため」と思っていたましたが、毎回違う講師の方が興味深い講演をしてくださり、気づいたら毎授業を楽しみにしていました。ありがとうございました。

ソフトウェアエンジニアや起業家だけでなく、ただの社会人のような方の話も聞いてみたかったです。

シンクタンクやコンサルタント部門の方の仕事内容や業界の動向、どのように分析を行っているのか、データ分析のスキルアップのためにどのように学習すればよいかについても伺えるとうれいです。

10-2 特別講義全体を通しての意見・感想(2)

去年はグループの差があると思ってやり辛かったですが、話が進まないグループの時は自分がリーダーになることで円滑に議論することができ、自分から動くことが大切だと分かりました。

リモート参加者も、ブレイクアウトルームで仕切ることで、その中で意見を出し合えた。

何が正解なのか分からないからこそ、様々な意見や考えが出てきて、面白かったです！

グループワークを通してリーダーシップの大切さを学んだ。

グループワークが毎回あり、様々な学生と関わることが出来て良かったです。

話し合いの時間が短い中で、アイデアを出し合いまとめることが難しかった。

講義の時間が普通の授業時間ではないため、用事などで行けないことがあるが、アーカイブがあることで欠席してもレポートの作成ができて助かった。

レポートにコメントしていただける講義は他にないので良かった。

悪いところだけでなく、良いところも書いてくださったので、講義レポートに対するモチベーションが上がりました。

提案ではなく実行できるようにするにはどうしたらいいか、まで気づかされたのでレポートを添削してもらえてよかったと思います。

今まで受けてきた講義でレポートをこんなにもしっかりと評価していただいたことは一度もありませんでした。自分の改善すべきところが明確になり、将来のためになりました。

11. 本特別講義の終了に当たって

この特別講義は、2011年に知識工学部経営システム工学科の鈴木威一先生の発案で、東京都市大OBの経営者に講師をお願いする特別講義「グローバル社会における経営」としてスタートしました。2013年に鈴木先生が退任後、松崎吉衛先生が、そして、2020年から私がこの授業を引き継いでできました。

2020年は、新型コロナウイルスの影響でフルリモート授業になり、また、学部・学科名が変更されました。その中で、特別講義のテーマを毎年変え複数年の履修を可能にするとともに、ハイブリッド授業を前提に、他学部・他学科の学生の受け入れも積極的に行いました。また、講師も東京都市大OBの若い経営者やエンジニアに門戸を広げました。その結果、毎年100名を超える学生がこの講義をとるようになりました。

ところで、知能情報工学科としての特別講義は、私の特任教授退任と共に今回で終了します。しかし、東京都市大OBの活躍を学生に広く知ってもらうこの授業の重要性が認められ、2025年度からは、共通教育部の教養特別講義として、全学対象の科目として再出発します。ご期待ください。

これまで、本当にありがとうございました。



芝 正孝

情報工学部

知能情報工学科

特任教授 博士(工学)

付1. 講演者の詳細プロフィール

【注】所属・役職は講演当時のものです。



付1-1 遠藤綾介氏 (2024/10/8講演者)

- 2001 武蔵工業大学環境情報学部 環境情報学科卒業
(株)牧野フライス製作所 入社
- 2001～2003 営業本部 アジア営業部
アジア地域向けの機械販売、輸出業務の実施
- 2003～2007 Global Aerospace Groupに配属
航空機市場向けにグローバルメンバとの営業活動を実施
- 2007～2024 営業本部 海外営業部
北米、欧州およびグローバルなキーアカウントユーザへの営業
- 2024～現在 営業本部 営業企画部
機械販売の戦略立案、製品管理や新製品の起案、上市



付1-2 江幡哲也氏 (2024/10/22講演者)

- 1965年 神奈川県出身
- 1987年 武蔵工業大学(現東京都市大学)電気工学科卒業
- 1993年 早稲田ビジネススクール マーケティングコース修了
- 1987年 (株)リクルート入社
 - └ 情報通信ネットワーク事業部にて様々な職種を経験
 - └ IT系を中心に5つの新規事業を立上げ収益化
- 1998年 同社経営企画室 中期事業戦略責任者
 - └ リクルート各事業をインターネットへシフト
 - └ 海外ITベンチャーへの事業投資、M&A、VC投資等
- 2000年 (株)オールアバウト創業 代表取締役社長 兼 CEO
- 2005年 JASDAQ証券取引所上場
- 現在 オールアバウトグループ代表
 - └ デジタルメディアを中心に、EC、生涯学習、ヘルスケア
グローバルPR、ベンチャー投資事業等を事業を拡大
- 新経済連盟幹事、農林水産省、文部化科学省、観光庁等委員経験多数 [講談社刊]



付1-3 網谷憲晴氏 (2024/11/12講演者)

- 1992年3月 武蔵工業大学 経営工学科卒業
- 同年4月 (株) 日立製作所 システム事業部 輸送システム部 入社
- 2015年付1月 交通システム社 インテグレーションダイレクタ
(Hitachi Rail Europe出向)
- 2018年4月 鉄道ビジネスユニット COO 兼 CDO
- 2019年10月 戦略企画本部 経営企画室長
- 2022年4月 執行役常務 鉄道ビジネスユニット Deputy Group CEO
兼 Head of Japan Business
- 2024年4月 執行役常務 ビルシステムビジネスユニット CEO
兼 株式会社 日立ビルシステム 取締役社長

COO: Chief Operation Officer(最高執行責任者)

CDO: Chief Digital Officer(最高デジタル責任者)

CEO: Chief Executive Officer(最高経営責任者)

付1-4 張本貴雄氏 (2024/11/26講演者)

- 2007年 武蔵工業大学 環境情報学部 環境情報学科卒業
- 2007年 クルーズ株式会社入社
- 2010年 クルーズ株式会社取締役就任
↳ 2012年にファストファッション通販「SHOPLIST」を立ち上げ、7年で250億円規模まで成長。
- 2020年 Free Standard株式会社創業
↳ ブランド・メーカー自ら2次流通チャネルを構築可能な流通ソリューション「Retailor」を提供。



Forbes Japan 「2024年注目スタートアップベスト6選出」
日経クロストренд 「日本スタートアップ大賞2023、大賞受賞」

付1-5 津田賀央氏 (2024/12/10講演者)

- 2001 武蔵工業大学環境情報学部 環境情報学科卒業
- 2001～付1 (株)東急エージェンシー
広告コミュニケーション・プランナー
広告代理店でデジタル領域のプランナーとして活動。
- 2012～17 ソニー(株)
サービスデザイナー／UXデザイナー
クラウドサービスやモバイルアプリ、ハードウェアなどの
プロトタイプ企画開発、コンセプト設計、UXデザインなど。
- 2015～現在 Route Design合同会社
代表社員/プロジェクトデザイナー/サービスデザイナー
コワーキングスペース「富士見 森のオフィス」(長野県・富士見町)、
クリエイター向けコワーキングスペース「PILE」(神奈川県・横浜市)の運営のほか、
企業のブランドコミュニケーション、商品開発など、様々な事業や場を“デザイン”する。



付1-6 劉功義氏 (2024/12/24講演者)

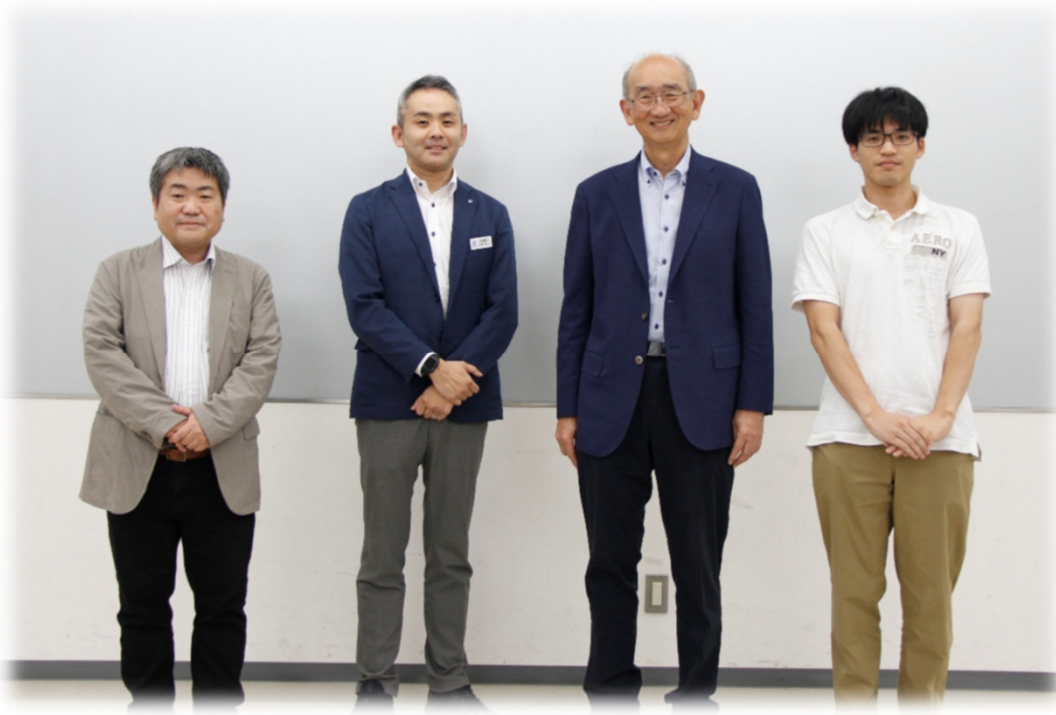
- 2006年 武蔵工業大学 工学研究科 経営工学専攻修士卒業
- 2006年 日本アイ・ビー・エム株式会社入社
大規模分散データプラットフォームの構築・運用に従事
- 2015年 東京都市大学 工学研究科 博士後期課程修了
- 2018年 神奈川大学工学研究所客員研究員 着任
- 2021年 日本アイ・ビー・エム株式会社
エグゼクティブ・アーキテクト就任
- 2021年 キンドリルジャパン株式会社転籍、同社プリンシパルアーキテクトに就任
- 2023年 同社アプリケーション・データ&AI事業部 デリバリー統括ディレクター
エンジニアのリーダーとしてデータとAIを活用したビジネスの変革に従事



付2. 講演者の方々を囲んで



第1回 遠藤さんを囲んで (2024/10/8)



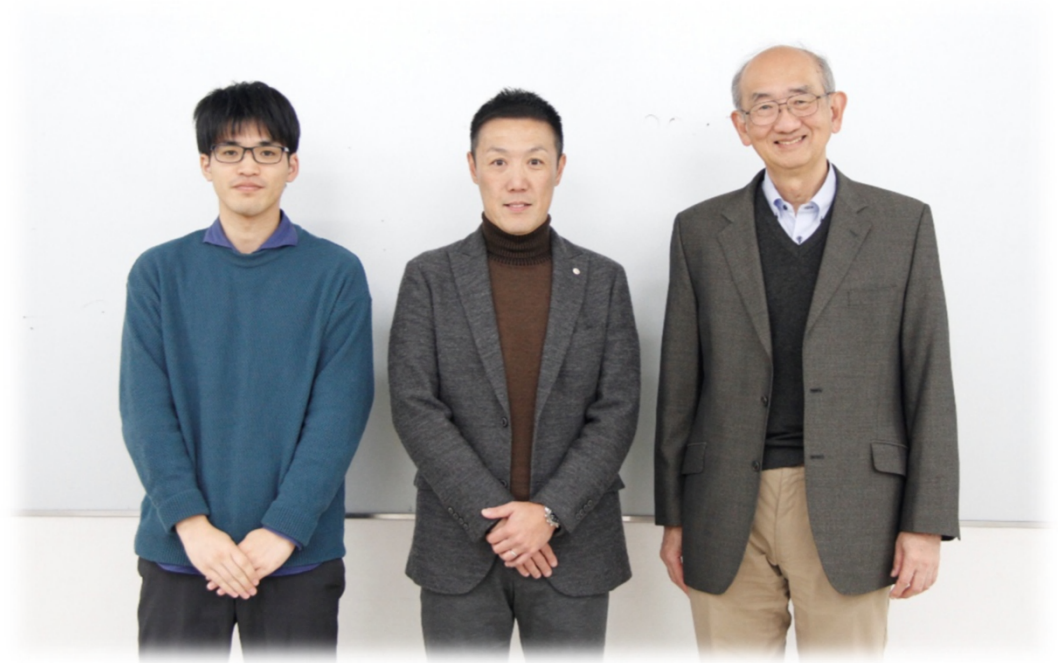
第2回 授業中の江幡さん (2024/10/22)



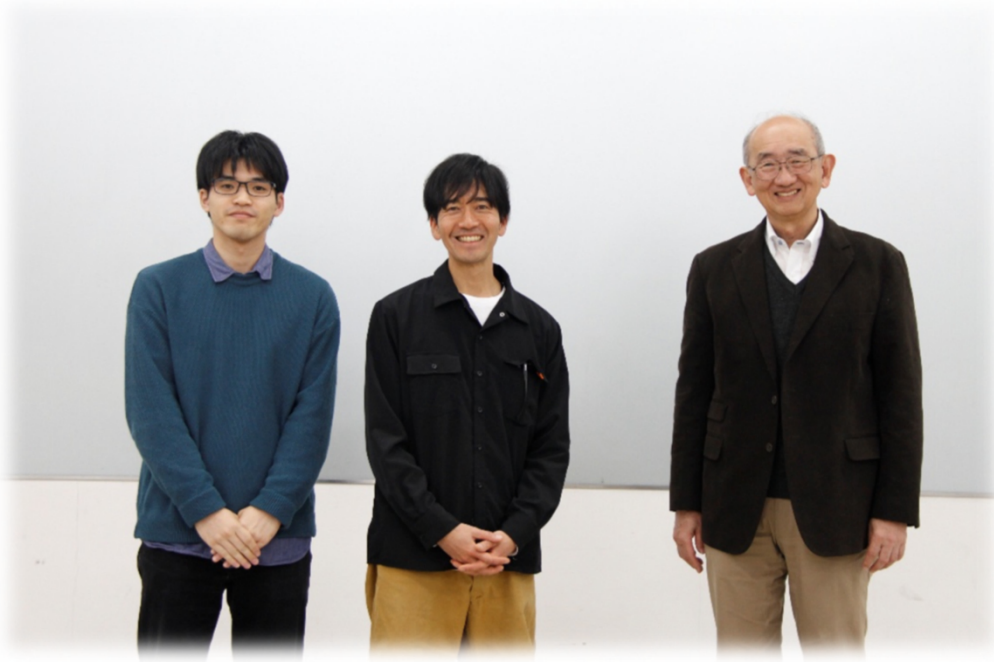
第3回 網谷さんを囲んで (2024/11/12)



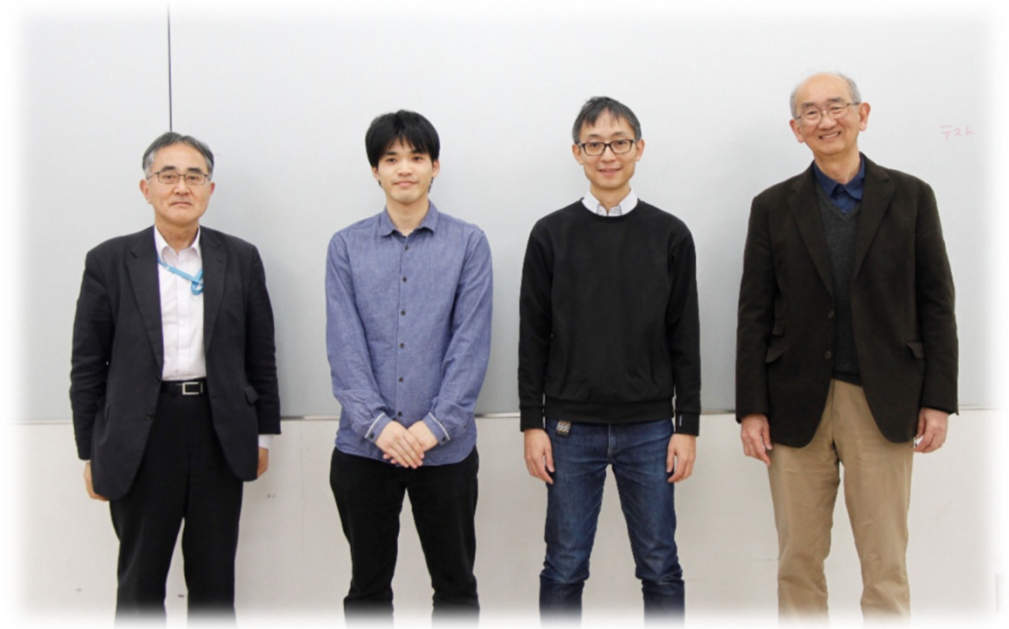
第4回 張本さんを囲んで (2024/11/26)



第5回 津田さんを囲んで (2024/12/10)



第6回 劉さんを囲んで (2024/12/24)



付3. アーカイブ

2020年度特別講義「デジタル社会に求められる人材」

<https://it.tcu.ac.jp/is/is-special2020.pdf>

2021年度特別講義「デジタル社会に求められる人材」

<https://it.tcu.ac.jp/is/is-special2021.pdf>

2022年度特別講義「ビジネスにおける情報の利活用」

<https://it.tcu.ac.jp/is/is-special2022.pdf>

2023年度特別講義「デジタルが創る過去・現在・未来」

<https://it.tcu.ac.jp/is/is-special2023.pdf>

2024年度特別講義「ビジネスとICT(情報通信技術)」

<https://it.tcu.ac.jp/is/is-special2024.pdf>

特別講義

「ビジネスとICT(情報通信技術)」

～ 東京都市大学卒業生による特別講義～

プロジェクト マネージャー
協力
アドバイザー
撮影・編集
TA
主催
後援

芝 正孝

岡田 公治

鈴木 威一

薩川 宣昭

春田 朋紀

情報工学部 知能情報工学科

校友会・経友会・知湊会(旧経工会)

松崎 吉衛

芝 正孝